西川良一先生の人と業績

辻　　忠　夫

1

西川良一先生は大正7年（1918年）1月18日に奈良県北葛城郡王寺町久度2—12—24で生まれられ，昭和10年（1935年）3月地元の奈良県立郡山中学校をご卒業の後，大阪外語学校（現在大阪外国語大学）フランス語部に進まれた．そして，同学校をご卒業の後，直ちに大阪商科大学学部（現大阪市立大学商学部）に進学され，昭和16年（1941年）3月同学をご卒業になり，同年4月より大日本紡績株式会社（現ユニチカ）に勤務なされた．ただ当時兵役の義務があり，しかも第二次世界大戦の最中であったこともあり，そのまま会社勤めを継続されるわけにはいかなかった．そこで敗戦の日まで陸軍参謀本部付フランス語通訳官として兵役の義務をはたされた．先生のきわめて実践的なフランス語は，この時期に磨きをかけられたものと拝察する．

その後再び大日本紡績株式会社に戻られ，調査課に勤務されたものの，昭和24年（1949年）5月には同志社外事専門学校専任講師に就任され，学生主事も兼ねられた．この学校は同志社経済専門学校，同志社工業専門学校とならんで，同志社の三つの専門学校を構成するものであって，新制の同志社大学の発足と同時に，大学予科とともにその教養課程を構成するものとして発展的に解散した．そして先生は昭和26年（1951年）4月に同志社大学経済学部専任講師となられ，以後現在にいたるまで，経済学部のスタッフとしてその悠然とした先生の温容にわれわれはもちろん，きわめて多数の学生も接することができたのである．このことは先生もご存知ないであろうが，かくいう私も先生のフランス語の夏季講座を一夏受講したことがあった．今先生の古稀記念論文集にフランス語の論文を寄せるにあたって感慨新たなものがある．

さて，本学部ご在職中，先生は単に学究としての道を歩まれたのではなく，広く社会的にもご活躍になり，なかでも，奈良県教育委員および委員長を昭和47年（1972年）12月以降11年間の永きにわたって勤められ，文部大臣によりすでに教育功労賞をうけてお

られることは，先生のお人柄を知るうえで注目に値しよう．こうした社会的ご経験の豊かさは，当然のことながら，先生のご研究のなかに反映されており，先生の理論的お立場であるマルクス主義に欠けがちな複眼的視野をわれわれはそこにみるのである．

2

さて，先生のご研究の領域は流通経済論である．この部門は生産の分野を重視する従来の，講座派・労農派論争以来のマルクス主義経済理論ではきわめて手うすな研究分野であった．それだけに，専門外の私にとっては先生のご業績を評価・紹介することなど思いもよらないことである．ここでは先生ご自身のご教示のもとに筆をとってその責を果させていただくこととしたい．

さて流通論はわが国の「マルクス」理論のもとでは軽視されてきたといったが，先生によると，マルクス自身は，物的交換の社会的意義から始まって，商業資本と産業資本の本質とその相互的なかかわり方，平均利潤率と商業資本との関係など注目すべき考察を行なっていた．これを理論的出発点として，戦後流通経済論とか商業論が展開されはじめたのである．それが昭和30年代に新しくアメリカから導入されてきた，市場販売競争の理論と販売促進政策としてのマーケッティング論をその体系内に組み込むことによって新展開をみるにいたった．加えて，日本の生産力の復興・発展に伴うマス・プロダクションに対応するマス・マーケットの生成過程において，いわゆる「流通革命」論が生まれ，これが実践的課題を流通経済論につきつけ流通近代化論が形成されてきた．ここから流通組織・機構の実証的分析が重要な研究領域となり，これが理論的考察にも反映され流通経済論を内容豊かなものとしていったのである．そして先生が生涯をかけての研究課題とされたのは，この理論と実証の両面，つまり平均利潤率の課題と流通組織の近代化にかかわる個別的実証的研究とであった．

このうち，平均利潤率の課題についてみれば，J・ギルマンの主張の検討と発展が中心である．その成果は彼の『利潤率低下の理論』の飜訳（雄渾社1968年刊）と『経済学論叢』掲載の「「利潤率低下」と「不生産的費用論」」（第16巻 第4号），「「マーケティング費用」の一視角」（第18巻 第1・2・3号）などである．先生はこのようにギルマンの主張に注目された理由を，「それは彼・ギルマンがマルクスの理論体系における利潤率低下傾向の検討を彼自身の所論方式において行ない，その妥当性を論じている点

に注目したわけでありました」とのべておられる．

ところで，このギルマンの所論方式とは何か．このことについて先生は以下のように説明しておられる．そのまま引用させていただこう．彼の独特な所論とは「消費された資本としての不変資本Cと可変資本Vとの対比である資本の有機的構成をフロー・ベーシス基準でおこなう剰余価値率と利潤率の算出，他方，投下資本によるストック・ベーシスの算出における剰余価値率と利潤率」，この二つのベーシスによる算定剰余価値率を1850—1952年の間と，1952—1962年の間についてアメリカの製造工業統計によって計算し，次のように論じていることである．つまり，1919年までの検証においては，マルクスの利潤率低下の理論は適用されるが，1919年以降の有機的構成は一定か，下落する傾向があり，剰余価値率は上昇の傾向にあり，マルクスの利潤率低下の理論が適用されえない事実が認められるが，それは「不生産的費用」によって説明されると．

ではこの「不生産的費用」とは何か．ギルマンはこの概念を社会的総資本の立場における不生産的費用つまり社会的費用としての不生産的費用と個別資本的・企業経営的立場の不生産的費用とに区別している．そして，前者は現代の独占資本主義の時代には，剰余価値（S）を実現さすための費用として，それはまた，販売促進による剰余価値の実現のための費用として，剰余価値（S）より当然差引かれるべきものであるという．そこで，これをUとしてS－Uを算出してみると，その結果は利潤率低下が傾向として現実に生きているという．つまり彼は，不生産的費用概念を用いてマルクスの理論の妥当性を証明しようとしたものだと先生は指摘しておられる．ところで，この不生産的費用とは，ギルマンによると，「独占資本主義における剰余価値の実現費用であり，商業労働者，官公吏などの不生産的労働者を養う費用，広告宣伝費，役員手当など」である．そして先生はほかならぬこの「広告・サービス費用をマーケッティング・コストとして流通費用に占める機能的コスト」に注目され，それへのアプローチを通して，いわばギルマン理論の継承発展という形で流通経済論を展開してこられたのである．

もちろん，このギルマンの理論は，マルクスの本来の立場では質的評定をするべきである「価値」「利潤率」「剰余価値率」などを量的評定において算定する基本的誤認を侵している，という批判が多く加えられている．そしてギルマン自身もこうした多数の批判は十分に熟知していて，1965年1月にニューヨークでギルマン宅を訪れられた先生に「マルクス経済学の誤解（misconception）ではなく，マルクス経済学の時代的発展

のための一つのもがき（wriggle）の一里程標であります」と語っておられたそうである．その三年後にギルマンが他界されるまでの間，先生とギルマンとの間にはたびたび音信による質疑応答がくりかえされている．この意味で，先生の流通経済論の基本的理論の指向性にギルマン理論は大きな影響を与えているとは先生の述懐である．

次にわが国の「流通近代化」の理論的研究についてみよう．わが国のこの分野での研究状況を一般的にみれば，現実の流通部門，とくに末端配給にいたる規模の零細性，取引経路の迂回度の長さ，生産価格と流通価格とのマージンの大きさの非合理性などを流通経済の政策論として論じられてきている．つまり政策論としての「流通近代化」が理論的にも政策的にも「流通経済論」の重要な研究内容として取り入れられているわけである．

これにたいして先生は「流通近代化」をマクロ的に，グローバルに把握しても意味がなく，むしろミクロの立場において考察すべきことを主張されてきた．こうして，個々の製品の流通組織や取引条件，さらにその個々の製品の位置づけられているプロダクト・ライフ・サイクルを検討しつつ，その製品業界の生産・流通・消費の量的・価格的・市場的性格と条件を部門別に実証的な研究をつみ重ねて来られている．それが『経済学論叢』（同志社大学）における「日本の「鉄鋼流通価格」制と問屋関係——生産財マーケティング・アプローチ」（第22巻 第2・3・4号），「繊維流通の若干の史的考察」（第28巻 第5・6号），「医薬品市場の特殊性と流通関係」（第28巻 第3・4号），「薬価基準をめぐる医療問題」（第39巻 第1号），「流通近代化の一考察」（第28巻 第3・4号）などである．これらのご研究に関して先生は次のようにのべておられる．「要は各製品の生産と流通の諸条件，その諸条件の支配する流通市場の性格は製品自体の経済財としての性格と，その位置するライフ・サイクルによって決定されてくる．したがって流通近代化の理論は各製品の一定の市場条件の同時多発の段階か，各製品のそれのギャップが存在している段階かを分析・分類の綜合の上においてアプローチされねばならない」．

さて，以上は先生のご専門の分野についてだけみてきたのであるが，そのご研究はそれだけに限られたわけではない．その多岐にわたるご活躍からも理解されるように，フランスの幾多の経済理論の訳出・紹介から，ユダヤ問題，国際経済関係論，郷土史，教育問題，はてはタガログ語講座から会話術とそのご業績はきわめて多彩である．これらことごとくを消化し紹介する能力を私がもたないことを申しわけなく思うとともに，今後とも，こうした広い領域でもご活躍されるよう心からお祈り申しあげる次第である．